厳粛に執り行われた「中野正剛先生顕彰祭」

玄洋

館　報

玄洋108号

平成23年1月1日

発　行

社団法人　玄洋社記念館

郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6-36 西公園ハイツ201号
吉村剛太郎事務所内
電 話（092）762-2511
FAX（092）762-2502

「中野正剛先生顕彰祭」を斎行

「天下一人を以て…」の気概今こそ

憂国の士、中野正剛先生を慰霊、顕彰する「中野正剛先生顕彰祭」（中野正剛先生顕彰会主催）が昨年十月二十三日、福岡市中央区今川一丁目、鳥飼八幡宮内の中野先生銅像前で執り行われた。五十人を超える方々が参列した。

山内勝二郎宮司を司祭に神事が進み、筑前琵琶日本旭会総師範、中村旭園師による「中野正剛」の献奏で式典を締めくくった。

挨拶で、同顕彰会の吉村剛太郎理事長は、中野先生が戦時下の昭和十七年十一月十日、母校早稲田大学で行った東條英機首相弾劾の演説「天下一人を以て興る」を引き合いに出し、「中野先生の演説は、現在の日本にも通じる」と次のように述べた。

当時、国民は内外の情勢もよくわからず、国は東條を中心に進んでいた。中野先生は演説で「国民一人一人が歴史を学んで国家を考えよう」と訴えた。今日の世相を見たとき、中軸が何かわからない。慰霊祭を機に中野先生の訴えを考え、そして周囲に伝えるのは有意義なことではないか。

先覚の偉業、学校教育に

場所を同八幡宮の参集殿に移し、玄洋社記念館が所蔵する中野先生の吟詠の録音テープを聞いた後、直会（なおらい）が開かれた。

参加者はそれぞれの立場から中野先生とのご縁や中野先生への思いなどを披露した。

その中で、福岡の埋もれた歴史を掘り起こし紙面で紹介している西日本新聞記者の川上弘文氏は中野先生の偉業や玄洋社の存在を広く知らせなければならない、と熱く語った。

「顕彰祭は皆さんの努力で続いている。今の時代、中野先生や玄洋社の存在は一般にはあまり知られていない。こういう顕彰祭を、それらを知るきっかけにしてもらいたい」「（郷土の大先輩の足跡を）小中学校の歴史教育の中に加えないといけない。進藤一馬先生（元福岡市長、玄洋社最後の社長）のことも皆、忘れようとしている」

川上氏は、ビルの解体で史料展示施設「玄洋社記念館」が現在、休館中であることに触れ、自分は「記念館をつくろうと呼びかけているところだ」とも述べた。

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ

第二条　本國ヲ愛重ス可シ

第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

今号の主な内容

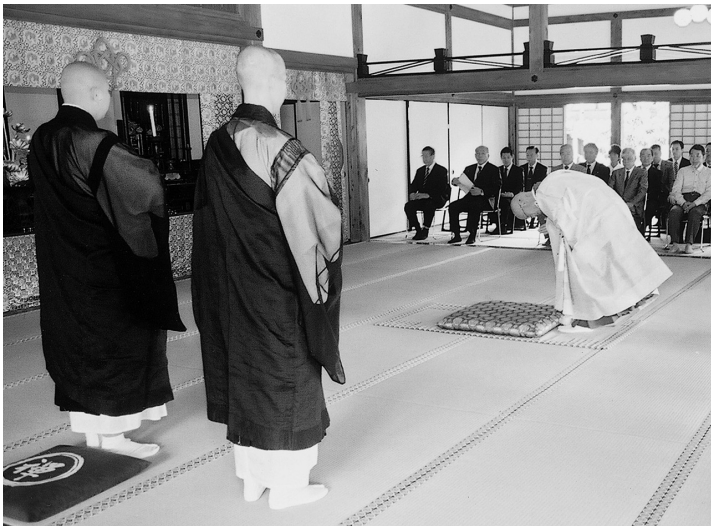
▽『玄洋社・封印された実像』を刊行して（寄稿）＝3面
▽「辛亥革命百年と東アジアの近代」（寄稿）＝4面
▽能「桧原桜」を上演＝4面
▽記念館事務所移転のお知らせ＝5面

玄洋社精神を興してアジアの平和と発展を―

頭山満翁並びに玄洋社物故者慰霊祭

厳粛に斎行

山崎拓理事長　〝漁船衝突〟で思い披瀝



崇福寺本堂での慰霊祭

頭山満翁はじめ玄洋社先覚を慰霊、顕彰する「頭山満翁並びに玄洋社物故者慰霊祭」が財団法人明道会の主催で昨年九月二十六日に玄洋社墓地のある福岡市博多区千代四丁目の崇福寺で厳粛に執り行われた。約三十人が参列した。

頭山翁の彫像が祭壇に安置された本堂で、岩月海洞住職が読経。参列者が焼香した。

参列者に、昭和五十一年の、頭山翁三十三回忌法要の際に、玄洋社記念館創設者、故進藤一馬先生が発行した記念誌「立雲翁の面影」の複写が配布された。

明道会の山崎拓理事長は挨拶で、参列者に出席の謝辞を述べたあと、中国革命の父・孫文と日本の実業家・梅屋庄吉の盟約を取り上げた読売新聞のコラム「編集手帳」に触れ、尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件に端を発した現在の日中関係への思いを次のように述べた。

梅屋と頭山翁は親交があり、共にアジア発展のために手を結んだ間柄。頭山翁は大アジア主義をもって孫文を助けた。支援した資金は現在の価値に換算すると一兆円にはなる。玄洋社はアジアのために働いた。

梅屋と孫文が盟約を交わした一八九五年は、奇しくもわが国が尖閣諸島を領土とした年だ。東シナ海における中国の傲慢な大国主義は我慢がならない事案。改めて玄洋社精神を興しアジアの平和と発展のために進むべきではないか。

山崎理事長は「感慨をあえて申し述べさせていただいた」と結んだ。

菩提寺節信院で司書公らを追悼

祭壇の前で行われた追悼の献笛

「乙丑の獄」で犠牲になった黒田藩の勤王派家老、加藤司書公と勤王党諸烈士の追悼会が司書公の命日に当たる昨年十月二十五日、福岡市博多区御供所町の節信院で催された。

嘉納浩一住職の読経に続いて八十人を超える参列者が焼香。筑前琵琶日本旭会総師範、中村旭園師の献奏、尺八今古流、明暗流の献笛、宰都館の献吟で諸先覚を追悼した。

筑前維新史研究会の力武豊隆会長の記念講演があり、藩主・長溥公に家老を解任された司書公の復権を図ろうとしながら、同士の勤王派から〝裏切り者〟と曲解され暗殺された、喜多岡勇平をめぐる秘話が紹介された。

明治維新後、勤王派諸士には、政府から贈位が実施され、黒田藩関係者にも贈位が続くが、喜多岡勇平には、遂に贈位がなかったという。

進藤喜平太の思い出・第2部

「追悼録」から

進藤喜平太先生追懐談　葛生　能久

（前号より続く）

日清戦争に際しては、壮烈軍國に殉じた三崎山中の一人山崎羔三郎氏の如き、又日露戦争中満州義軍を組織し皇軍の為めに活躍した諸士の如き、或は頭山先生に従って孫文、黄興等を援助し中華革命を遂行せしむるに至った如き、其対外的諸問題に貢献したる功績も亦た挙げて数うべからざるものがあったのであります。

尚玄洋社志士等の大陸各地に出入致しまするや、当時其志を同くする国内各地の志士等は地理上の便宜並に同士間の淵叢として一種の連絡所とも見るべく、現地の各方面への往来毎に途中概ね玄洋社を訪問するを常としましたが、進藤先生は是れ等の志士に対しましても一々胸襟を被き懇切な対話を以て応対されましたので、其の同士は頗る多く、社員の活躍する方面も頗る広範に亘ったのであります。

玄洋社から出した有為の志士は斯くの如く多士済々たるものがありましたが、進藤先生が是れ等志士の養成に苦心されたことは実に容易ならざるものがあったと思われるのであります。それは後年先生が或人に向って

「我々が玄洋社を創立した当時の考えでは、立派な人間百人を養成したい。そうすれば其餘は烏合の衆でもよいと思って居たが、百人立派な人間を造るという事は却々むつかしいものだ」と述懐されたとの事によっても知られるであろうと存じます。

進藤先生の青年時代はおそらく眉目清秀な方であったろうと想像致しますが、私が先生にお目にかゝったのは明治二十六年に朝鮮に赴く際、旅行免

『玄洋社・封印された実像』を刊行して

石瀧　豊美

石瀧　豊美 氏

『玄洋社発掘―もうひとつの自由民権』（一九八一年、西日本新聞社）、『増補版　玄洋社発掘―もうひとつの自由民権』（一九九七年、同）に続く第三版、『玄洋社・封印された実像』を二〇一〇年十月、福岡の海鳥社より刊行しました。読売新聞、西日本新聞、日経新聞、図書新聞などで取り上げられ、さらには週刊金曜日でも永六輔さんが触れて下さっていると聞いています。文字通り、玄洋社の封印が解け、実像が明らかにされることを願っています。

二〇一一年は辛亥革命から百年にあたり、日本各地で記念行事が催される予定ですが、中でも亡命した孫文を身をもってかばった玄洋社については、より一層注目されなければいけません。ところが、中国近代史の研究者ですら、宮崎滔天や梅屋庄吉について取り上げることはあっても、玄洋社の功績に眼を向けることはありません。知らないと言うより、初めから知ろうとしないと言った方が正確だと思います。戦後、玄洋社の真実の姿は歴史から抹殺されてしまった、というのが、私の感慨です。

このため、品切れになっていた旧著を、二〇一一年には何とか世に送り出したいというのがここ数年の私の希望でした。初版刊行から実に三〇年、いまだに玄洋社は誤解のただなかにあります。超国家主義、侵略主義、秘密結社、大陸浪人、右翼、なかにはヤクザと表現するものすら眼にしますが、すべて間違ったレッテルです。旧著では五八二名の玄洋社員名簿を掲げていましたが、本書ではこれを六三〇名まで拡張できました。これでほぼ玄洋社員は網羅していることでしょう。この中には、広田弘毅、中野正剛、緒方竹虎ら、昭和史に屹立する巨人が含まれていますが、歴史家たちが彼らを玄洋社員と見ることはほとんどありませんでした。

玄洋社の歴史は明治十二年（一八七九）から昭和二十一年（一九四六）まで、足かけ六十八年の長きにわたりました。敗戦にともなう、GHQの解散指令がなければ、現在も玄洋社は人材を輩出し続けたにちがいないことでしょう。玄洋社の歴史は強制的に断ち切られたのでした。

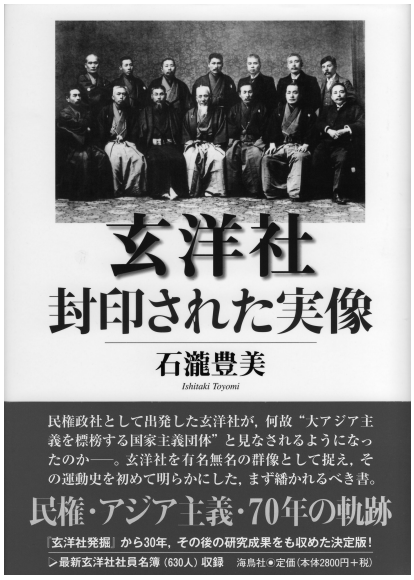
本書には、「玄洋社と日中不戦の思想」という一節を収録する予定でした。昭和十二年七月七日の盧溝橋事件に始まる日中戦争のさなか、すでに八十歳を超えていた晩年の頭山満を中心にした玄洋社の人々はひそかに日中和平工作に従事していました。当初は日中が戦うべきでないという「不戦の思想」として書き始めたのですが、調べるにつれて、外務省や軍部の抵抗を排した、蔣介石重慶政権を相手にした地下工作であることが明らかになり、とうてい本書に収まりきらないことがわかってきました。それで、玄洋社をめぐる日中和平工作の事実は、本書の続編として準備することにしました。

進藤一馬さんら、玄洋社最後の生き残りの方々が健在だった三〇年前、そうした問題意識を持っていなかったことが悔やまれます。日中和平工作については、関係者の証言を聞く機会は永久に失われたからです。しかし、玄洋社員のご子孫の中には、関係資料を保存しておられる方もあるかもしれません。情報をお持ちの方はぜひご連絡をお願いします。

さて、本書は旧版に比べ、いくつかの違いがあります。あらたに「今なお、虚像がまかり通る玄洋社」を書き下ろしました。また、大正二年（一九一三）、辛亥革命成功後の孫文が、玄洋社へのお礼をこめて福岡に関係者の墓参を行ったときの新聞記事を収録しました。さらに、昭和十七年一月一日、朝日新聞に掲載された中野正剛の「戦時宰相論」は東條英機総理大臣を激怒させ、発禁処分となったことは知られていましたが、従来なぜか、それが内務省警保局によってなされたのか、情報局によってなされたのか、説が分かれたまま両論併記の状態でした。私は本書でその謎解きに挑戦しました。旧版をお持ちの方も、新しい玄洋社論をじかにお確かめいただければ幸いです。

なお、本書の一部を抜粋して、十一月には電子書籍『玄洋社・封印された実像《抄録版》』もインターネット上の「理想書店」で販売されています。福岡の友人たちが取り組んでくれた成果です。あわせてご紹介させていただきました。

※『玄洋社・封印された実像』海鳥社発行（税込二、九四〇円）。一般書店でも入手可能ですが、石瀧から直接購入された場合は「玄洋社関係史跡マップ」を添付してお送りします。FAX：〇九二（九三三）〇四二六　石瀧まで、住所・氏名を明記してお申し込み下さい（番号非通知は受け付けませんのでご注意願います）。



辛亥革命百年を前に発刊された『玄洋社・封印された実像』の表紙

状を受けるため、兄東介（玄晫）の紹介で玄洋社に立寄り一ヶ月許り先生のお世話になった時でありました。

先生は当時丁度四十四才で、頭山先生の雄偉なる体躯とはちがって幾くらか痩せ形の颯爽たる姿で、鼻下に八字髭を蓄えられ白哲の風貌に重厚謹厳恰も古武士の如き風格を具えられた人でありました。

先生は親切温情を以て人に接せられたので、徳望最も厚く、玄洋社の諸豪は何等の不平不満なく喜んで其の命に服し、深く尊敬して居たのであります。

先生は寡黙な人でありましたが、一たび志を決するや断乎たる不動の決意を以て対処されて居た人でありました。曾て先生が玄洋社を率い自由民権の旗幟を飜へし改進党と戦って居られた際、進歩党が組織されることになり其の委員が来て、

「貴方は自由のために力を致されておられるが、此の際進歩党のために盡くして貰いたい」

と説いた事がありました。

（この項続く）

辛亥革命百年と東アジアの近代

有馬　学

もうしばらく前の話になってしまうが、平成二十年の十一月二日に、玄洋社記念館の物故三館長合同慰霊祭の席で、短い講演をさせていただいた。

その際には、ちょうど玄洋社記念館の所蔵史料が福岡市博物館に寄託された後だったこともあり、まず第一に、歴史を考える上で貴重な史料をきちんと保存し、活用することの重要性について申し上げ、次に、そのような史料をふまえた実証的な検討を通じて、ただ一種類に固定されるものではない、さまざまな玄洋社のイメージが浮かび上がってくることをお話ししたように記憶している。

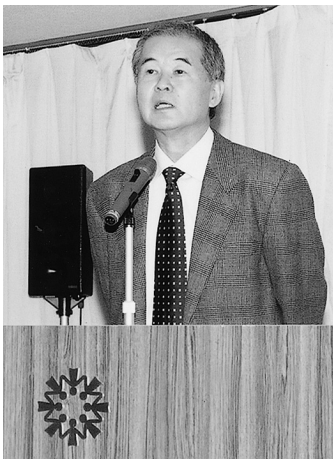
そのさまざまな玄洋社イメージの一側面が、辛亥革命への援助活動であったことはいうまでもない。そして、本年は辛亥革命から数えて百周年にあたる。講演の最後にあたって、ご来場の皆さんに、その節目に福岡が何もしないでいいんですかと問いかけたのを思い出す。

私が委員長をつとめる福岡市史編集委員会では、市史編さん事業の一環として、東アジア近代史学会、福岡ユネスコ協会と共催で、この秋に辛亥革命と福岡にかかわる記念講演会を企画しており、できれば関連資料の展示も行いたいと希望している。博物館への史料寄託も含めて、玄洋社記念館とのかかわりが、企画をめぐる機縁の一部をなしていることは疑いない。

若い世代にとって、百年という時間をへだてて近代中国の出発点をふり返るのは、ほとんど古代史を見るのと同様の歴史感覚なのかもしれない。しかし、あえて尖閣列島問題を持ち出すまでもなく、隣人である中国とどのように付き合うかは今日の課題である。そのとき辛亥革命について考えることは、とりもなおさず近代中国とは何かという問いに向き合うことである。それは同時に、我々が東アジアと日本について自己省察を深めることでもあるだろう。

そのような意味で、私どもの企画に関心を寄せていただきたいし、新聞やテレビなどの地元メディアや、自治体の動向も注目される。これは官民を問わず(それこそ正に玄洋社的なものではないか)、福岡という地域社会の歴史感覚を磨く機会でもあるのだ。

(筆者は福岡市史編集委員長、九州大学名誉教授)



玄洋社記念館「物故三理事長合同慰霊祭」で講演する有馬学先生＝福岡市・国際ホールで

進藤先生と「桧原桜」のエピソード

新作能で上演

市民の財産として後世に

道路拡幅のため伐採される運命にあった桜並木を、市民が詠んだ命乞いの和歌に応えて故進藤一馬市長(玄洋社記念館創設者)が返歌を詠み、伐採計画を変更して救った福岡市南区の「桧原桜」をめぐるエピソードが「能」として創作され、昨年十二月四日、同区の南市民センターで上演された。

題名は「新作能『桧原桜』」。時代を江戸後期におき、福岡の今泉に住む歌人、大隈言道が、桜の美しさに誘われて散策に出かけ、いつの間にか桧原桜のところまでやってくると、そこへ花の精が現れ「人々の桜への思いが天に届いて、この美しい桜が、今あるのだ」と「桧原桜」の物語を聞かせるという筋書き。

花の精の役に、公募で選ばれた十四人の小学生も、この能の上演のために特別に作られた博多織の能衣装を着けて出演。進藤市長をモデルにした「筑前の花守」も登場して、荘厳で華やかな物語が展開された。

定員八百人の会場は鑑賞の市民で満員になった。観客の一人は「能は難しいものと思っていたが、解説もあり、とても分かりやすく親しみやすい内容でした」と語っていた。

「新作能『桧原桜』」の舞台。中央が進藤市長がモデルの「筑前の花守」

この新作能の上演は、南区役所(四宮祐司区長)と九州大学大学院芸術工学府ホールマネジメントエンジニア育成ユニットの連携事業として企画され、能楽各流派などが集まる福岡市能楽協議会、博多織工業組合、香蘭女子短大の協力で実現した。

南区役所は、進藤市長と市民の和歌の交流から生まれた「桧原桜」のエピソードを広く市民に知ってもらい、市民共有の財産として後世に語り継ごうと、一昨年から関連事業を積極的に展開している。

一昨年は、昨年と同様に九州大学大学院の同育成ユニットとの連携で「ファンタジー・桧原さくら物語」を上演している。

進藤理事に叙勲

平成二十二年の秋の叙勲で、社団法人玄洋社記念館の進藤邦彦理事が地方自治分野の功績で「旭日小綬章」を受章された。

県知事による受章者への伝達式が同年十一月四日、福岡県庁で行われ、進藤理事は受章者を代表して挨拶された。

進藤理事は、玄洋社記念館創設者で元衆議院議員、元福岡市長の進藤一馬先生の秘書を経て、昭和六十二年から福岡市議会議員を五期二十年、務められた。

記念館からのお知らせ

事務所が移転しました

このたび「社団法人玄洋社記念館」及び関連団体「社団法人廣田弘毅記念青少年育成会」「中野正剛先生顕彰会」の事務所は移転しました。新事務所の住所は左記の通りです。

電話、ファックスの番号は、これまで通りで変更はありません。

「社団法人玄洋社記念館」と関連二団体は、「玄洋社の真実の姿の伝承と諸先覚のご遺徳の顕彰」を目的に諸事業を展開しておりますが、今般、新事務所を得たのを機会に、さらに活動を充実させる所存です。

皆様におかれましては、今後とも変わらぬご協力、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

社団法人玄洋社記念館
社団法人廣田弘毅記念青少年育成会
中野正剛先生顕彰会
理事長　吉村　剛太郎

◇

【新住所】郵便番号八一〇―〇〇六二
福岡市中央区荒戸三丁目六―三六
西公園ハイツ二〇一号
吉村剛太郎事務所内
【電　話】〇九二―七六二―二五一一
【FAX】〇九二―七六二―二五〇二

墓参した左から山城直之、進藤邦彦、大江田信、見月信介の各氏

進藤先生のお墓参り

励志会有志ら

玄洋社記念館の創設者、進藤一馬先生の祥月命日前日の昨年十一月二十七日、「励志会」有志四人が福岡市中央区平和・平尾霊園の進藤先生の墓参りをした。

「励志会」は進藤先生が主宰した青年たちの勉強会。命日の墓参は同会の恒例行事で、毎年、数人から十数人が参加している。

墓参の後、進藤先生も愛した同区大名の水炊き屋で直会をするのが慣例。この日の墓参でも、さらに四人が合流して行われ、進藤先生を偲んだ。進藤先生は平成四年、逝去された。

賛助会員芳名録

（11月20日現在・敬称略）

▼個人の部

【三万円】
吉村剛太郎（福岡市）

【二万円】
山嵜　泰生（那珂川町）

【一万円】
西方　忍（福岡市）
酒井　智堂（鹿児島市）
坂上　智之（奈良市）
中村　敦子（東京都）
田口　純（春日市）
大塚　一夫（福岡市）
安部　義彦（東京都）

卯 謹賀新年
平成23年元旦

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役社長　花田　勲
専務取締役　児玉和久
本　社　福岡市博多区東比恵三丁目二四―九
〒八一二・〇〇七電話（〇九二）四八一―三一〇〇
東京支社　東京都杉並区高円寺南一―二三―一
〒一六六・〇〇〇三電話（〇三）五三七八―五八〇〇
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社　アキラ水産
AKIRA Oh. Fresh! Sea foods.
代表取締役社長　安部泰宏
本　社　福岡市中央区長浜3丁目11―3―711
電話〇九二―七一一―六六〇一（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産

損害保険コンサルタント
太宰府天満宮前駐車場
漢方薬相談　とおりゃんせ
(有)日産企画　大江田信
薬剤師　大江田美子
〒818-0117
太宰府市宰府三丁目四―二十一
☎〇九二―九二四―六二九六

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社　別府梢風園
代表取締役社長　別府壽信
BEPPU
本　社　〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六―五三
TEL〇九二―六九一―〇六七八(代)
FAX〇九二―六九一―四五五四
E-mail : info@shoufuen.co.jp

(財)日本医療機能評価機構認定
HARADOI HOSPITAL
特定医療法人
原土井病院
理事長　原寛
―開放型病院・臨床研修指定病院―
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

玄洋社関係史料の紹介

石瀧　豊美

第50回

宇田川文海『西南拾遺』（二〇）

（早稲田大学図書館所蔵）

明治十二年九月刊行
小室信介閲
宇田川文海編輯
『西南拾遺』巻之五
吉岡大次郎、勇戦　震志、小梅に訣別す。（続き）

　僕は斯く同志に誓ひし身なれば、今更に落延んこと思ひもよらず。されど君は初陣の客将、今日来つて今日去るも更々武夫の恥ならず。速に間道より篠栗村に帰り候ふべしとて、否む吉岡を様々とすかしなだめ、漸く間道を落しやりぬ。

　是れ震志我大事の成らざるを知りて、多年松江に辛労させし恩義に報ゆる心にて、吉岡大次郎の一命を助くる心なりとぞ聞えし。

　されど、其後大次郎は何処へゆきしか、行衛知れず、今に篠栗村へは帰り来ざるよしなるが、此は間道にて官兵に出遇ひ、無慚にも討死せし者かと、人々云ひ合へるよし。其真偽は知ること能はず。他日確報を得て記する処あるべし（吉岡大次郎の事、此下に物語りなし）。

　偖も震志は吉岡大次郎を落しやりしかば、今は心にか〻るものなしとて、戦場に引返しければ、味方の兵は散々に伐立られ、討死・手負数知れず。討洩されし物共には、右往左往に散乱して、最早一所に残れる者は僅かに三十八人とぞ数へられける。

　かくては兎ても捷利は思ひも寄らずと、震志一人後に残りて、臂なしつ、追すがり来る官兵を打払ひ打払ひて、同国秋月の城下迄辛ふじて引揚げけり。

　爰処にて再び残兵を集めて数ヶ所の陣処を構えつ、民家に押入りて兵粮などを掠め取り、稍しばし息を休めける折柄、越智彦四郎の固めたる陣門に一人の美婦出来りぬ。其面ばせは旅つかれに痩せたる様見ゆれど、天然の容色、自ら備りて眉目猶あでやかに、衣裙は泥にまみれ、けがれたれど、褄はづれの模様、何となう仇めきて、いとゆかし。

　実にや漢代の王昭君が胡国にゆきし身を詠じて、翠黛紅顔錦繍の粧ほひ、泣て沙塞を尋ねて家郷を出づといひしも、かくとおもふばかりなるが、陣門に進み近づきて、大将に物申さん。誰かある、招介玉へとぞ呼はりける。

震志はしぶる吉岡を篠栗村（現、福岡県糟屋郡篠栗町＝写真）に帰した。

　あな胆太き女かな。さりとては、又美しき奴にぞある。如何なることをやいふならん。苦しふあらじ。呼入れて、軍中の憂なぐさめよ、と罵り合ひ、若殿原の五、六人も其処に走り出て、彼女を内に引き入れ、汝は如何なる者にて、何故ありてかく我陣に恐れ気もなう来りつるぞ、と問ひけるに、女は少しも恐ぢたる体なく、御問ひに答へ奉る前に、妾より一言問ひまいらせたきことあり。

　抑も此陣は関東方に候ふや、はた福岡勢にておはせるか、と様子あり気に問ひかくるに、若殿原は用こそあらめと目くばせしつ、我々は関東より下向せる官軍にて候ふぞや。用事あらば疾く申候へと、口々に云歎きけり。

　女は斯くと聞きて身を起し、此は益なき処へ来りはべり。官軍と聞けば妾には用はなし。いざ罷り候はんとて、会釈なく立帰へらんとなしければ、人々驚き這奴益々うさんなり。留おきて子細を糾問せんと云ひ様、手取足取しつ隊長越智の前にぞ引据えける。

　越智、深くこれを訝りて、女の懐中を改め見しに、一通の書状あり。表に博多梅どの、三木より、と書したり。手に取り上げて少時頭を傾けしが、稍ありてハタと手を打ち、此は心当りたり。汝こそは森震志と二世の語ひをなせしと聞く、博多水茶屋町若藤屋の芸妓、小梅ならめ。

　扨は今般我々の挙を聞き、震志の先途を見届けん為遙々爰処に来りしか。聞しに勝る貞操、節烈、天晴にこそ覚ゆれ。今は何をか隠さん。我は森震志と同志の一人、越智彦四郎と云ふ者なり。用事あらば隔意なく申されよ、と云ふに、女は莞爾と打笑み、

　扨は君には御手の大将越智氏におはしけれ。推し玉ふ如く、妾は博多の小梅なり。若殿原の中には知られ給ふ人もありぬべけれど、斯く面やつれ、衣さへ垢つきたれば、見忘れ玉ひしにや。如何なる憂目をも見せ玉はんか、と心惑ひしに、君に見出されていと本意ありと思い候ひぬ。

　いかで此上の御恩に、震志ぬしに一目逢はしたび玉へかし、と他事なく聞ゆる一言には、千万無量の心こもりて、いとも哀れにぞ聞えける。

　越智はかくと聞きて打うなづき、云はる〻、趣き心得たり。さらば案内しまいらせんと少し隔てし震志の陣へ案内を添えて送りやりぬ。

　震志は此日も向後の戦略如何にやせんと千々に心を挫く時、越智の陣より送り来る物ありと云ふに怪しみ、何者ならんと立出見れば小梅なりけり。此はいかにとばかり呆れまどひぬ。

　小梅は震志を見るよりも其嬉しさ、得も言はれず、飛立つばかりに思ひつ〻、震志の傍にすり寄りて、物も得いはず、泣伏しけり。実に前年震志が小梅に堕落せし頃は、朝に流に臨みて、鴛鴦の契りの濃かなるに比べ、夕に天を咏めては二星の誓ひも物かはと語らひつ〻、さしもに離れがたき中なりしも、斯く乱れたる世の有様となりては、一時の契りさへも穏かに夢結ばれず。

　況いて夫と頼める男の、修羅の衢に往来ふを見ては、気も消ゆるばかりに案じられ、柔弱き女の身ながらも、夫をおもふ一念にて、野をも過ぎ、山をも越えて、かくやつれやつれて尋ね来しものなれば、男の面を見て、しからば気も心も弛みてや、舌も結ばれ、眼もうるみて、只ひた泣きになき伏せしは、千言万語を費すにも勝りて、情深か〻りと、傍に見聞く人々は皆征衣の袖しぼらぬはなかりけり。

　稍ありて小梅は頭を擡げつ〻、震志にむかひて云ける様、前の夜、本意なう相別れてより、能くこそ無事にながらへをはしけれ。妾も彼夜よりいとゞ君の身の心にか〻りて耐えがたければ、若藤屋の主人に数日の暇を乞ひ、箱崎・太宰府に一夜づ〻参籠なしつ。其侭博多へは立帰へらで、君と生死を共にせんとて、斯く跡を追ひまゐり候ひぬ。